

渦語り (五)

文・小西 一三
絵・小西 由紀子

「渦から出てきた二銭銅貨」

前回は取材でお世話になった塩口地区の桜庭為治さん。その時、自宅の仏壇前に置かれていた明治八年の二銭銅貨。よく話しを聞くと、この銅貨はシジミ漁をしていて偶然見つけたものとか。いつ、どのようにして見つけたのか。なぜ、仏壇にお供えているのか。じっくり話をうかがいました。

拾ったのは親父のお祥月命日の日

あれはまだシジミがたくさん獲れていた平成二年のこと。あの頃は三時間も引けば、五百キロから六百キロの水揚げがあった。銭コ拾ったのは忘れもしねえ、十一月五日。親父のお祥月命日だったからな。

親父は八十歳で亡くなったけども、田んぼも無いのに漁だけで十一人の子どもを育てた漁師だった。名前は亀蔵。漁の仕方も酒の飲みかたも全部教えてもらった親父だったな。船着場でシジミの選別中、アバが偶然見つけたのよ。それまで何回も「通し」を通して最後の通しだった。薄っぺらな銭コだもの、タテになればすぐ落ちる。どこまでもヨコになってきたもんだべ。見つけた時はまっ黒で、何かわからなかった。それをアバが磨き粉をつけて磨いていたら銭コだったというわけよ。模様が少し消えたけども、明治八年という字がしっかり見えるべ。

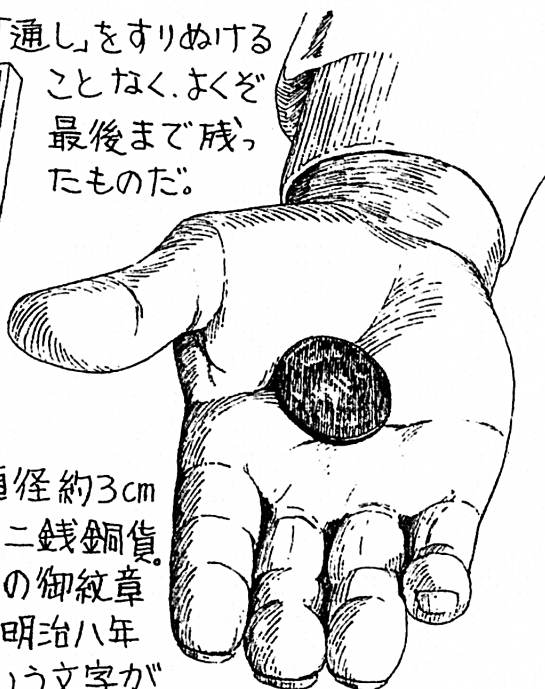
渦では明治以降も事故が多かったし、誰が失くしたものの

やら……。渦で銭コ拾ったのは後にも先にも、これが初めて。しかも親父のお祥月命日。偶然に偶然が重なった、なんとも不思議なことだよな。
古銭として売ってもたいした値ではねえと思うけども、俺にとっては金貨と同じ。だから、こうして仏壇にお供えしてるのよ。

シジミを選別する「通し」。この「通し」をすりぬける



ことなく、よくぞ最後まで残ったものだ。



直径約3cm
の二銭銅貨。
菊の御紋章
や明治八年
という文字が
はっきりと読みとれる。